

## 5 . 阿蘇からの報告

### 「阿蘇草原再生への取り組み」

【新井正久 / 九州地区自然保護事務所 所長】

本日は大勢の方にご来場いただきまして、ありがとうございました。私からは阿蘇の草原再生に向けた様々な取り組みについてご報告いたします。

#### 阿蘇の草原の分布

先程、長野さんから阿蘇のすばらしい写真を沢山見せていただきました。ご案内の通り、阿蘇は九州あるいは日本を代表する観光地でもあります。そこには延々と広がる草原がございます。全国的に見ても、これほどの規模の草原は、国内では阿蘇の他には見当たらないと思います。

図 21 は環境省の自然環境保全基礎調査の植生図を映し出したものです。



ちょっと色が濃くなっているところがススキ、ネザサ、草千里のようなシバの群落等の、草原の分布を示しています。阿蘇にはこのような形で草原が広がっています。図中で赤い線で括弧してある部分が、阿蘇くじゅう国立公園区域です。草原の多くが国立公園区域に含まれています。

阿蘇には年間 1,900 万人の観光客が訪れますが、観光客を対象としたアンケート調査の結果、約 8 割の方々が、「草原の広がる風景が阿蘇の魅力」であると答えています。その一方で、「なぜ阿蘇に草原が広がっているのか」という問いに正確に答えられる人は余りいないというのが実状でもあります。

#### 人の手によって維持される阿蘇の草原

阿蘇の草原は、人々の営みの中で、生業の中で維持されてきたものと言われています。これは、阿蘇の草原が今もあるのは、牛を放牧し、採草し春に野焼きをする事で維持されてきたからなのです。

#### 多様な草原の価値

阿蘇の草原にどのような価値があるのかということについて、かいつまんでお話をさせていただきます。地域の人々の生業として、牛を放し、草を刈り、火を放って維持してきた草原ですが、これについては、中村先生から二次的自然というお話がありました。つまり、この草原の価値の一つは、放牧や採草といった、農畜産の場として活用されていることにあるかと思えます。

阿蘇は、国立公園に指定され、毎年多くの方が風景を楽しみに訪れるわけですが、そういった意味で草原景観が重要な観光資源となっているといえます。

さらに、阿蘇には様々な植物が咲いています。ヒゴタイやツクシマツモトなど九州が大陸とつながっていたことを物語る植物も見られますし、ハナシノブ、キスミレなど、阿蘇の草原にしか自生していない植物、あるいは全国的に見ても希少な植物が多く見られます。そういった意味で生物多様性の保全の場といった価値もあります。

また、阿蘇は九州の五県を流れ下る 6 本の一級河川の源流部になっています。そういう意味で、国土保全、水源涵養の上でも重要な役割を果たしています。

さらに草原には、色々な文化がございます。(図 22) 昔、外輪山の上で採草を行うために、地域の方々は草泊まりを作って何日か泊り込みで草を刈りに行ったと聞いています。また、従来は人力で草木を刈り「草小積み」に積んで干していました。これらは、阿蘇の人の知恵であり、風物詩であります。



このような多様な価値を有する阿蘇が、最近では、危機にあるのです。

#### 有畜農家の減少や農業形態の変化による草原面積の減少

明治・大正期から現在までの阿蘇の草原の推移を示した図を見ると、現在では、大きく面積が減少しています。

このように阿蘇の草原が減った原因として、一つは、農業形態の変化が考えられます。機械化や化学肥料の普

及などにより、野草地や茅野などの必要性が低下しました。

また、牛肉輸入の自由化などを通じて畜産業が低迷し、放牧頭数が減ってきているということがあります。私も県と一緒に行った最近の調査では、過去5年間で阿蘇の牧野組合に所属する有畜農家の数は3分の2にまで減っているというデータが出ました。

管理が放棄されて10年くらい経つと、草原は景観的にもかなり劣化した状況となってきます。草原面積減少のもうひとつの理由は、農業従事者の減少及び高齢化に伴って、採草や野焼きといった管理行為がなかなか維持できなくなったということがあります。

野焼きをする前提に輪地切りという作業があります。これは、急な斜面での大変きつい重労働です。農業従事者の減少及び高齢化に伴って、こういった管理作業が厳しくなっているという状況があります。

毎年、阿蘇で野焼きされる草原の面積は16,500haといわれています。これはサッカーグラウンドの大きさで数えると23,500面分という広大な面積になります。また、毎年、森林等への類焼を防ぐための輪地切りの延長は640kmといわれています。これは阿蘇から名古屋市までの距離に相当するものです。こういったなかで広大な草原の維持管理が困難になってきています。

草原面積が減ったり草原のありようが変わってきたりしているという中で、環境省としては、国立公園としての景観の劣化、あるいは生物多様性の低下を問題視してきているところです。

#### 環境省による阿蘇草原再生に向けた取り組み

こうしたことから、私も環境省では、阿蘇の草原環境保全に向けて、平成8年からいろいろな取り組みを進めていますが、平成12年から着手した国立公園内草原景観維持モデル事業においては、輪地切りを省力化するために、モーモー輪地という取り組みを進めています。輪地にするとところを電気牧柵で囲み、そこに牛を放して牛に輪地切りをしてもらうという取り組みです。先程中村先生の方からお話がありましたが、森林が増えれば増えるほど輪地切りの延長が長くなります。あまり成長の良くない、さらには小規模な森林は除去して輪地切りの省力化を図ることも試みています。

15年度からは阿蘇地域自然再生推進計画調査を始めしております。

図23は調査の中身を若干ご説明しているものですが、例えば衛星画像を用いて今阿蘇の草原がどういう状況になっているのかという解析を行っています。さらには草原管理について、都会の人たちに作業を支援してもらうモデルツアーが成り立つのかどうかという試みもしています。それから右下の写真にある「阿蘇草原再生シ-

ル」は、阿蘇の野草を堆肥などに利用して育てた農産物に貼って販売を促進し、草資源の利活用を図ろうという試みです。



#### 地域における取り組み

環境省としての活動をご紹介しましたが、阿蘇では、他にも草原の維持、保全に向けた色々な取り組みが進められています。

例えば、農林水産省や熊本県では、中山間地域等直接支払い制度といった、農業の多面的機能を確保するための助成事業を行っています。

また、財団法人阿蘇グリーンストックでは、野焼き・輪地切り支援ボランティアを組織し、牧野組合の要請に応じて派遣しています。

さらには阿蘇地域振興デザインセンターによる阿蘇の草原を活用したカルデラツーリズムの展開や、熊本県あるいは南阿蘇の畜産協同組合による畜産振興を通じた草原維持なども行われています。

地域で活動している様々な団体については、今日お配りした資料でもご紹介していますので、後ほどお読みください。今日は阿蘇での取り組みに、実際に携わっている方々にここに来ていただき、その活動をご紹介します。インタビューは、自然保護事務所阿蘇草原再生を担当しております羽井佐自然保護官です。

## [現場からの報告]

【インタビュー：羽井佐幸宏 /

環境省九州地区自然保護事務所自然保護官】

### 畜産業の取り組み

阿蘇モーモーレディースの会 / 草尾幸子氏

狩尾牧場 / 草尾直美氏

羽井佐：まずは阿蘇の草原利用の主役である、あか牛の放牧をなさっている、草尾幸子さんと草尾直美さんをお招きしています。

直美さんには、阿蘇の畜産を支える若手代表としてこちらにきていただきましたが、そもそも直美さんが畜産を志すようになったきっかけをお話してください。



(図 24：右から草尾幸子氏、直美氏、羽井佐自然保護官)

直美氏：生まれた時から動物に囲まれた生活をし、小さい頃から家の牛の世話の手伝いもしていたので、自然に動物に関わる仕事をしたいと思ったのがきっかけです。

羽井佐：確かに、先日お邪魔した草尾さんのお宅には、沢山の動物がいました。おそらくあか牛だけで20頭、そのほかチャボ、山羊、犬、猫とまるでどうぶつ王国のようです。そういった環境で育ち、大学を卒業して、単独でアメリカに渡って畜産の研修を受けてこられました。アメリカの農業技術で、もっとも強く印象に残っていることをお話してください。

直美氏：アメリカでは、とても広い放牧地で馬に乗って、何千頭もの牛を集めるという仕事をしました。アメリカの農業は日本では比べ物にならないくらい大規模で、技術的にも進んでいてすごかったのですが、日本とは違って牛一頭一頭に対する愛情が薄い印象を受けました。

羽井佐：帰国されてから北外輪山の狩尾牧場で牛の世話を引き受けていらっしゃるんですね。牛の世話というお仕事を毎日されて、一番嬉しいのはどういう事でしょうか。

直美氏：やはり仔牛が元気に生まれて育ってくれるのが一番嬉しいです。あと、仕事ですごく疲れていても、阿蘇の景色を見ているとまたエネルギーが湧いてきます。



(図 25：牛の世話をする直美氏)

羽井佐：いま後ろで写っている写真は、直美さんが仕事中に携帯電話でパチパチと撮った写真ですが、こういった雄大な景観の中に身を置いて仕事ができるのも阿蘇で畜産業をしているからこその特典のような気がします。

次は、幸子さんに伺います。幸子さんが会長をつとめる阿蘇モーモーレディースの会は繁殖と肥育を行っている農家の奥様方で結成されたグループです。今55名の会員が元気に活動なさっていますが、私は畜産というのは男性がやっているものとばかり思っていました、多くの女性が活躍なさっているのですね。



(図 26：くまもとモーモーレディース連絡協議会の皆さん  
：後列左から2人目が草尾さん)

幸子氏：そうですね、畜産は女性ならではの仕事だと思っています。牛のお産にしる、育て方にしる、きめ細やかな配慮ができることは女性の特権だと思っていますので、牛を養うことは女性に適した職業だと思っています。

羽井佐：畜産のお仕事は、やっている本人が意識するしないに関わらず、草原環境を守ることに繋がっていると思います。直美さんはその事についてはどのように捉えて普段お仕事をなさっていますか。

直美氏：最初はただ一生懸命仕事をしているというだけだったのですが、草原再生の話聞くようになって、草

原は当たり前にあるものではないということを感じました。自分たちで守っていなければいけないということを感じました。これからは、ただ単に放牧頭数を増やすだけでなく、草原環境をいかに守っていくかということ考えた牛の飼い方をしていきたいと思います。

羽井佐：確かにこれまでは生業として農業や畜産をすることが、阿蘇の草原環境を維持してきたという背景があるのですが、これからは少し環境の方にも目を向けながら畜産をやっていくことが大事になるかもしれません。

この草原再生という取り組みに、もっとも手軽で、もっともおいしく参加する方法が、阿蘇のあか牛を食べることだと思います。信念とこだわりをもってあか牛を飼育している幸子さん、あか牛のPRをお願いします。

幸子氏：あか牛が阿蘇に合うのは十分わかっています。緑の草原にも雪の草原にもよく映えますし、あか牛肉はヘルシーで健康にもいいと放送されました。皆さんに、あか牛に興味を持って頂き、地鶏を食べる感覚でぜひ召し上がっていただきたいと思います。

羽井佐：あか牛のお肉は、草原再生やあか牛TVのインターネットのホームページサイトを検索していただくと、買えるお店などが見つかると思います。本日ご来場の皆さんも、ぜひ、草原再生に参加してください。

#### 支援・参加の仲介役 (財)阿蘇グリーンストックの取り組み

##### 野焼き支援ボランティア /

舛尾義登氏、末光秀行氏

羽井佐：財団法人阿蘇グリーンストックは、あか牛のオーナー制度をはじめ各種取り組みを行っている団体です。その中でも草原再生・草原環境保全に向けて期待されているのが、野焼き支援ボランティアです。今日はそのリーダーである末光さんと舛尾さんに来て頂いています。

野焼きは、阿蘇では欠かせない作業ですが、お二人は、その準備段階の輪地切りなどを含めた野焼き支援ボランティアとして活躍なさっています。まずは、舛尾さん、野焼き支援ボランティアに参加しようと思われたきっかけはどんなことだったのですか。

舛尾氏：私は、定年前に何か社会に貢献できること、人の役に立つことをしたいと思っていた時に、熊本日日新聞で、野焼き支援ボランティアを募集していることを知りました。現在は市内に住んでいますが、元々阿蘇出身で高校入学まで一の宮の方に住んでいましたので、春先の野焼きや草原に牛が放牧されているのは日常の風景だったのです。野焼き支援ボランティアを通じて、阿蘇

の草原維持・再生の役に立つのであればということで、妻と共に研修を受けて6年ほど活動しています。



(図27：左が舛尾氏、右は末光氏)

羽井佐：お二人にはボランティアで活動なさる時の服装でおこしいただいています。末光さん、これまでどのくらい支援活動に参加され、また実際にどんな活動をなさっているのかを教えてください。

末光氏：私がボランティアに登録したのは今から3~4年前になります。年々参加回数が増えて、去年は25回くらい参加しました。シーズンの時はよく阿蘇に来ています。トータルで40回くらいは来ています。主な活動は、輪地切りと野焼きです。地元牧野の方の高齢化などで人手が足りないという理由で行っていますが、輪地切りの方は、刈り払い機や大鎌をもって急傾斜で作業をします。結構大変な作業で、終わったらもう足ががくがくになります。もうひとつは2月、3月の野焼きで、そろそろ始まります。主体である牧野の方が火をつけて回り、我々ボランティアは火消し棒を持ったりジェットシューターをかついだりして、後から火が延焼しないようにくい止めていくという仕事をします。

羽井佐：いずれにしてもハードな作業だと思いますが、そういった地元の方でも敬遠する作業を、遠くからお見えになって継続される理由を、舛尾さんお願いします。

舛尾氏：どうして6年も毎回参加しているかということ、やはり阿蘇が好きだからで、自分たちのしていることが草原維持になんらかの役に立っているという思いや、この阿蘇のすばらしい景観・風景を孫やひ孫など代々残して見せてやりたいという思いもあります。

それに、支援に行くと、地元牧野の方が嬉しそうな顔をして「お願いします」「ありがとうございました」と言って感謝の気持ちを示してくれるのです。そういう言葉を聞くとこちらもつい嬉しくなって、「また来ます」という気になって現在まで継続しています。



(図 28：火消し棒で野焼きの延焼防止に励む阿蘇グリーンストックのボランティアの方々)

羽井佐：末光さん、ほかには、どういった楽しみがあるんでしょうか。

末光氏：私は北九州から来ていますが、熊本県外の方も多くボランティアに参加しています。年齢も上は70歳近い方もいらっしゃって、そういった方たちがきつい作業を自分の仕事以上に一生懸命やっています。

その中で素晴らしい友情が生まれ、作業が終わった後に皆で話し合ったり、ちょっと飲んだりする時間を楽しみにしており、週末になると阿蘇が自分に「おいでおいで」と言っているようで、このボランティアを続けています。

羽井佐：このボランティアとして参加するためには、講習会の受講が必要となります。今年はもう応募は締め切ったのですが、また来年もありますので、ご来場の皆様も応募してみたいかがでしょうか。

#### 草原を舞台に都市・農村交流を進める牧野組合の取り組み

- 町古閑牧野組合組合長 / 市原啓吉氏
- 福岡エコ・コミュニケーション専門学校  
/ 有田良江氏、船迫笑子氏

羽井佐：続きましてグリーンストックのボランティアをはじめ、外部の方を積極的に受入れている町古閑牧野組合の組合長、市原さんに来て頂いています。市原さん、町古閑牧野組合は、外部の方を受け入れるという意味では非常に先進的な牧野組合だと思っていますが、そもそもどういった経緯から外部の方を受け入れ始めたのでしょうか。

市原氏：10年くらい前に地元の高校から職業体験として受け入れてもらえないかという要請がありました。ちょうど牧野離れが進んでいて、組合も高齢化し、人手も足りない時だったので、それをきっかけに外部の人の受け入れを始めました。牧野組合の草原維持活動にもこの

ような労力がかかっていることを、生徒たちを通してでも、みんなに是非知ってほしいと思って受け入れました。

羽井佐：当初、組合内には、外部の方を受け入れることに反対意見もあったと聞きます。受け入れてみて組合の方の感想はどういったものでしたか。

市原氏：思った以上の働きぶりで、組合員にもよく呼応して、火がちょろちょろ燃えているときなどは「行って」というと若いので走って行って消してくれますので、組合員から見ても頼りがいのある働きをしてくれました。

羽井佐：3年ほど前からは修学旅行生も受け入れていらっしゃるようです。そして去年は、環境省で実施した、環境学習プログラムとして牧野の作業支援を行うというツアーの受け入れも行いました。今日は、そのときの参加者、有田さんと船迫さんにもお越し頂いています。



(図 29：町古閑牧野組合組合では修学旅行生も受け入れている)

市原氏：お久しぶりです。その節はお世話になりました。

羽井佐：このツアーでは、なかなか参加者が集まらず苦労しました。そんな中、お二人はいち早く申し込んでくれ、阿蘇の草原での作業を希望して参加して下さいました。まずは有田さんこのツアーに参加しようと思ったきっかけを教えてください。

有田氏：私と船迫さんは、専門学校で自然環境を専攻しているのですが、研修の求人やボランティア募集用の学校の掲示板に、ツアー募集のチラシが張り出されているのを見て、興味が湧きました。草原再生のホームページを見て、さらに興味が深くなり、クラスメイトに呼びかけたところ船迫さんも関心を持っていたので、いっしょに行くことにしました。もともと国立公園に興味がありどんな事を教わるか経験したかったのですが、阿蘇のことは失礼ながらほとんど知らずに行きました。

羽井佐：予定していた作業は、採草作業という、主に草を集める作業でしたが、当日雨が降って、代わりに有刺

鉄線を張る厳しい作業になってしまいましたが、船迫さんはこれをやってみて如何でしたか。



(図 30：生れて初めて、雨の中で有刺鉄線を張る作業に取り組む)

船迫氏：作業自体は、今までにやったことがないことばかりで、同じ作業の繰り返しなのですが、やっていくうちに徐々に自分なりにコツをつかみ工夫していって、楽しかったです。また、自分と違う世代の人たちと話をしたり、阿蘇の広々とした環境の中で、牛や馬を見ながら作業する事はすごく楽しかったです。私は、福岡生まれの福岡育ちですが、阿蘇の事は何も知らなかったので、草原を知る良いきっかけになりました。



(図 31：右から、町古閑牧野組合組合長市原氏、専門学校生有田氏、船迫氏)

羽井佐：市原さん、楽しんで作業なさったとはいえ、お二人はとても熱心に頑張ってくれましたよね。

市原氏：そうですね。ちょうどその当時は台風の後で、畜産農家としては、いろいろな作業が重なっていました。防火帯を切る作業もありましたし、組合も手一杯な中、台風であちこち壊れた牧柵を、すぐに修理しないと放牧中の牛が脱柵するといった可能性があるという問題があったのです。お二方をはじめ皆さんに来て頂いて、牧柵修理が無事できて、本当に感謝しています。

羽井佐：市原さんにそう言って頂けるとうれしいですね。来年もこのツアーをやろうと考えていますので、お二人もまた応募して下さい。

以上、阿蘇で具体的な取り組みに参加・活動されている方々にお越し頂きました。これでご紹介を終わります。

#### 〔まとめ〕 / 新井正久所長

これまで紹介してきたように、阿蘇ではいろいろな人たちが手を取り合って草原を守ろうとしています。あか牛の消費拡大も草原の保全に繋がります。会場においでの皆様にも、ぜひ、いろいろな面でご協力あるいはご支援いただければと思っています。

最後に、阿蘇の草原の豊かさを物語る文化の一つご紹介したいと思います。この写真(図 32)は、盆花採りという文化を物語るものです。



(図 32：草原と人のかかわりを表す阿蘇の風物詩「盆花」)

この写真は阿蘇の草原保全に尽力されております大滝先生からお借りしました。最近の写真ではありませんが、阿蘇の人々は昔からお盆の時期になりますと、お墓にお供えするための「盆花」を草原で採ってお墓に供えたという文化がございます。

今ではこういう花々も、生育環境が失われたり、希少な植物は人が摘むことで大変なダメージを受けますので、採集が禁止されている種もあります。

しかし、文化として盆花採りが行われていた頃には、阿蘇のいたるところでこのような花が見られたのだと思います。阿蘇に住む人たちが、先祖の墓前に供えるだけの花々が咲き乱れていた環境、先ほど中村先生からは円山川の牛とコウノトリの写真を見せて頂きましたが、一つの写真が伝える美しい文化、それを支えてきた豊かな草原環境、豊かな地域、そういうものをもう一度ぜひ取り戻したいと思っていますところ です。

以上で、阿蘇からの報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。